

輸 入 検 疫 で 発 見 さ れ た 主 な 病 害 虫

昭和63年に輸入された植物から発見された重要病害虫は別表のとおりである。

このなかで、わが国が侵入を警戒しているウリ

ミバエ、ミカンコミバエなどが東南アジアなどからの旅行者により持ち込まれた熱帯果実類から数多く発見されているのが注目される。

	発 見 病 害 虫	寄主植物別発見回数	輸 出 国 別 発 見 回 数
輸入禁止品対象害虫	<i>Ceratitis capitata</i> (チチュウカイミバエ)	コーヒーノキ(1)	ブラジル(1)
	<i>Dacus cucurbitae</i> (ウリミバエ)	ササゲ(5)、ニガウリ(4)、カボチャ(1)、 キュウリ(2)、ヘチマ(1)	台湾(4)、タイ(6)、 フィリピン(2)、不明(1)
	<i>Dacus dorsalis</i> (ミカンコミバエ)	マンゴウ(49)、パンジロウ(44)、リュウガン(17)、 バンレイシ(12)、レイシ(9)、他15種(37)	台湾(70)、タイ(36)、フィリピン(27)、 インドネシア(5)、他5ヶ国(13)、不明(4)
	<i>Cylas formicarius</i> (アリモドキソウムシ)	サツマイモ(3)	台湾(2)、フィリピン(1)
特定重要病害虫	<i>Colletotrichum capsici</i>	トウガラシ(24)	タイ(19)、マレーシア(2)、他3ヶ国(3)
	<i>Anastrepha fraterculus</i> (ミナミアメリカミバエ)	コーヒーノキ(1)	ブラジル(1)
	<i>Hypera postica</i> (アルファルファタコソウムシ)	アスパラガス(1)、プロテア切花(1)	アメリカ(2)
	<i>Diabrotica undecimpunctata</i> (ジュウイチホシウリハムシ)	タマネギ(1)	アメリカ(1)
	<i>Pantomorus cervinus</i> (フラーバラソウムシ)	フドウ(2)、キウイフルーツ(1)、他3種(3)	ニュー・ジーランド(6)
	<i>Dendroctonus ponderosae</i> (アメリカマツノキクイムシ)	ホワイトパイン(7)、ロジボールパイン(4)	アメリカ(7)、カナダ(4)
	<i>Scolytus multistriatus</i> (セスジクイムシ)	ニレ(2)	アメリカ(2)

海外のニュース

Java downy mildewの野生寄主植物オーストラリアで発見

1986年、オーストラリア北部でJava downy mildewが発生していることが明らかになり、オーストラリアの植物防疫当局は本病の発生拡大を警戒している。1985年4月、クインズランド北部のアサートンとレイクランド地区で栽培されていたトウモロコシにべと病の被害が発生した。

翌年、この病原菌は、分生子と分生子柄の形態及び寄主範囲の試験の結果から、Java downy mildewの病原菌とされている *Peronosclerospora maydis* と同定された。Java downy mildew はインドネシアのジャワ島やインドの一部地域に発生し、トウモロコシのべと病として恐れられている。これらの地方では導入作物であるトウモロコシだけに発生している。しかし、本病はトウモロコシの原産地であるアメリカ大陸には発生はなく、本病のルーツはジャワ島などの発源地域と考えられた。過去数回ジャワ島などで野生植物の調査並びにそれらへの接種試験が行われたが、その証拠を

見つけることはできなかった。今回、オーストラリアにおいても本病の発生源について調査が行われた。その結果、発病地域で栽培されていたトウモロコシの種子は、本病が発生していないピクトリア州から購入されており、種子による伝搬はないと考えられたため、一次伝染源については発源地域周辺の野生植物が疑われた。調査の結果、トウモロコシ畑近くで *Plume sorghum* と呼ばれる野生のイネ科植物に本病と同じ形態のべと病菌が寄生していることが判明した。また、接種試験により相互に感染することが確かめられたことから、初めてJava downy mildewの野生の寄主植物が明らかになった。Plant Pathology (1988) 37, 581-587より

発行所 横浜植物防疫所
〒231 横浜市中区北仲通5-57(横浜農林水産合同庁舎) ☎045(211)2299

発行人 小畑 琢 志

編集責任者 長尾 記 明

印刷所 保土ヶ谷印刷株式会社